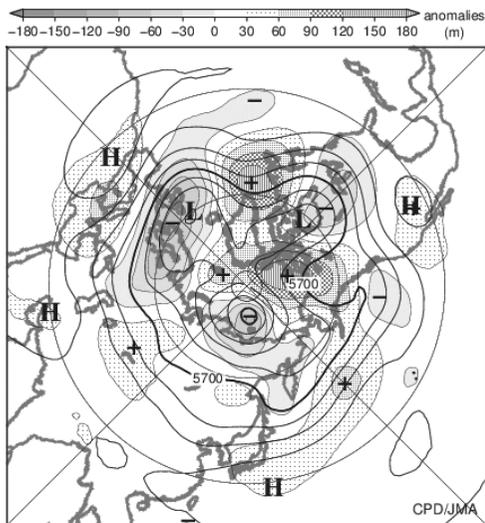


2023年7月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北米～北大西洋～地中海で波列状の偏差パターンとなり、アラスカの北、地中海で顕著な正偏差、ヨーロッパ北部で負偏差となった。米国南西部、アリューシャンの南～日本付近、中央アジア付近でも正偏差となった。200hPa 風速をみると、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流は平年の位置で平年と同程度の強さだった。北太平洋と北大西洋の偏西風は、平年の位置と比べて北寄りを流れた。海面気圧をみると、カナダ北部～グリーンランド付近で正偏差、ヨーロッパ北部やオホーツク海付近を含むユーラシア大陸北部の広い範囲で負偏差となった。太平洋高気圧の西への張り出しが平年よりも強かった。850hPa 気温をみると、地中海、米国南西部付近、中央アジア東部で顕著な高温偏差、ヨーロッパ北部で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、パキスタン～西部太平洋赤道域で活発、アフリカ～インド洋赤道域、北太平洋中部の北緯10度帯で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相の東進は不明瞭だった。対流圏上層では、日付変更線付近の赤道域の北側で高気圧性循環偏差となり、中部太平洋トラフは平年と比べて明瞭だった。対流圏下層では、インド洋で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。インド～フィリピンの東海上では低気圧性循環偏差、北太平洋の亜熱帯域では広く高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、アフリカ～インドネシアで正偏差、太平洋中部～南米で負偏差となった。南方振動指数は -0.6 だった。



2023年7月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は $+0.62^{\circ}\text{C}$ (速報値)で、1891年の統計開始以降、2016年、2021年を上回り7月として最も高い値となった。7月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約 $0.72^{\circ}\text{C}/100$ 年 (速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

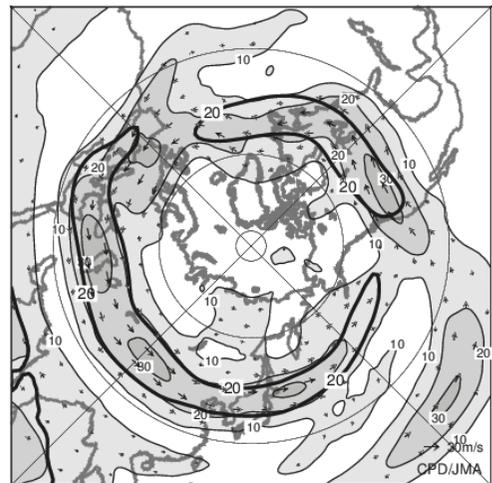
- 東シベリア南部～東日本、ベトナム～バングラデシュ、中国北部～中央アジア東部、サウジアラビア南西部、地中海沿岸、西アフリカ、カナダ東部、カナダ北西部、米国南部～南米北東部、南米西部、東南アジア東部～オーストラリア北部、オーストラリア南東部で異常高温となった。
- 中央シベリア南部～モンゴル東部、インド南部～パキスタン、ロシア西部、ヨーロッパ北部～西部、米国東部～中部、インドネシア南部～オーストラリア北部で異常多雨、中国北部～中央アジア東部、ベトナム～バングラデシュ、カナダ北西部、米国南部～メキシコ北部で異常少雨となった。

(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

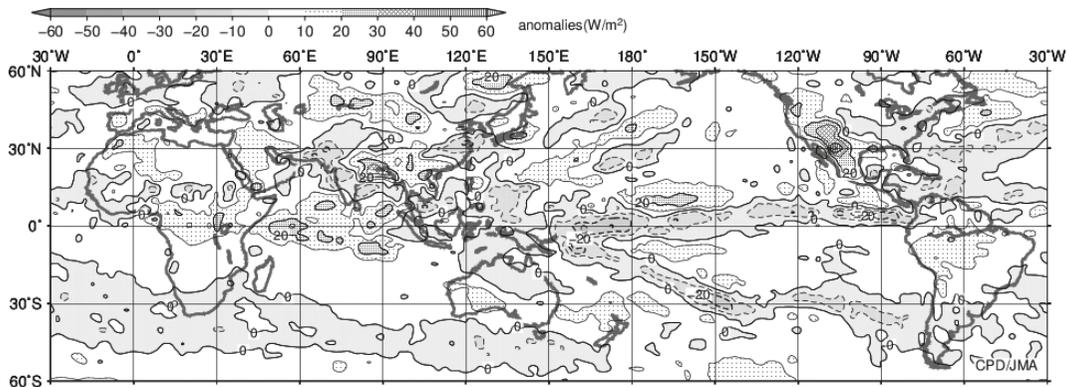
※ 特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>

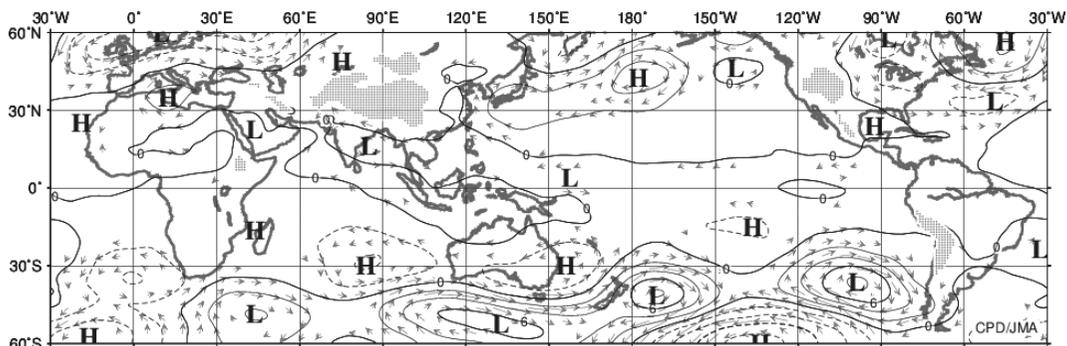


2023年7月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。

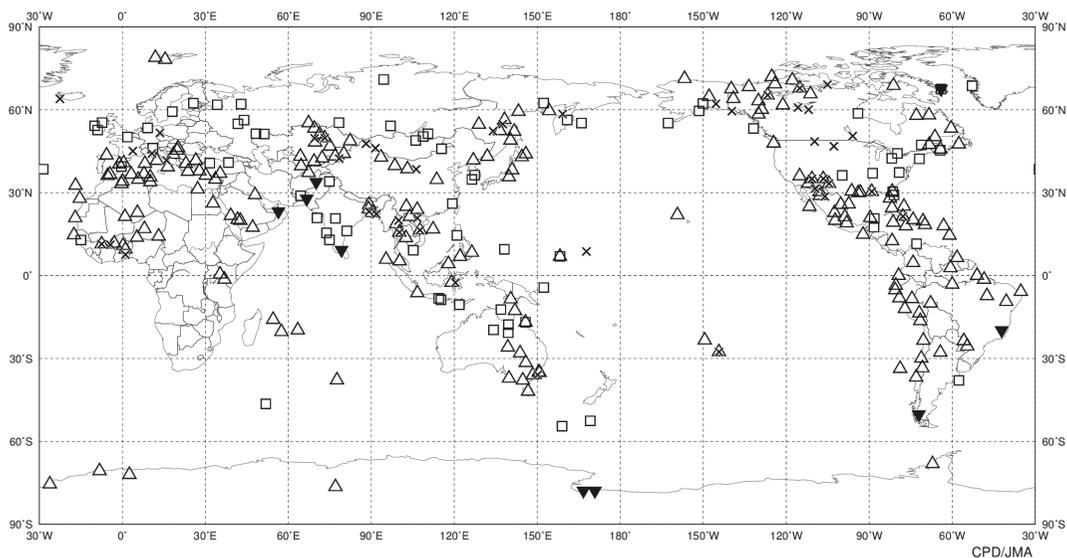


2023年7月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2023年7月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2023年7月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。